

## イチゴ萎黄病（病原菌：*Fusarium oxysporum* f.sp.*fragariae*）

### ○ 被害と発生生態

糸状菌によって起こる土壌伝染性の病気である。初期症状は、新葉が黄緑色に変わり、小葉が小さくなる。本葉3小葉のうち、1～2葉が小さくなるなどの奇形葉が発生し、症状が進んでいくと株全体が萎黄症状を呈し、萎凋し、最後は枯死する。被害株のクラウン部、葉柄部、果梗部を切断すると導管の一部または全体が褐色～黒褐色に変色している。根は黒褐色になり、腐敗しているものが多い。

本病は、地温が15℃以上で発病する。本菌は、分生子や厚膜胞子を形成し、前作の残渣内等で厚膜胞子の形で残り伝染源となる。また土壌伝染のほか、種苗伝染し、感染株の移動により、親株床から育苗床、育苗床から本ぽと感染が広がっていく。

### ○ 防除方法

- ・本ぽに定植する苗は、必ず無病地の無病株から採苗したものを利用する。
- ・親株床は専用床を用意し、必ず事前に土壌消毒を実施する。
- ・ウイルスフリー苗へ定期的に更新する。
- ・発病株は速やかにクラウンごと除去し、次作の前には必ず土壌くん蒸剤または太陽熱消毒を実施する。



葉の奇形（複葉が小さくなる）



枯死症状



クラウンの切断面（導管褐変）

切断したクラウンを湿室内に置くと褐変部よりカビが生える